

『キツカケ』

名暮 祐

今年もクールビズお手上げの季節がやってきた。

汗ばむシャツの胸元を掴む。

風通しが悪い、せめて第一ボタンを外そう。

冷房の効いた仕事場に踵を返したいものだが、敏腕と揶揄される総務部長に「俺がお前くらい若かった頃、霞ヶ関の情報通として重宝されたもんだ。いろんな部署を飛び回ってたんだぜ。だからさあ、その程度でへこたれてんなよ？」といった具合でどやされるのが目に浮かんで断念する。

仕事量に見合わぬ給料・休暇、続々と退いていく同僚たち。誉れと謳われたキャリア官僚も、大衆が憧れを抱く職業ではなくなつた。

……僕は何を想つてこの職に就いたのだったか。

振り返れば、僕はついぞ父親という呪縛から解き放たれることはなかったように思う。少なくとも、一人暮らしを始めるまで、彼を意識しない日は一瞬たりともなかった。

——いいや、そうだったか。

……潮の香りがする。

きつく結ばれた過去を紐解くには十分な香りだった。

海色の景色が広がる。香りが景色を呼び覚ます。

途方もなく惹かれたあの瞬間。

夕暮れに？ 地元に？

——違う、彼女だ。

……しかし、何故だろう。

何故僕は、あの瞬間、父親以上に彼女を意識したのだろう。恋心ではない、もつと別の理由。まるで既存の路線に新たなレールを敷くような、それまで僕になかった感覚を彼女はもたらしてくれたはずなのだ。

思い出したい。

どうしても。どうしてもだ。

この歯痒さを仕事に持ち込むわけにはいかない、そう自分に言い聞かせ、偶然見つけた木陰にあるベンチに腰かける。

……鯨が作り出した水しぶきのような巻積雲が、西の彼方に浮かんでいた。僕の故郷がある方角。

ああ、催す。心をギュッと掴み、涙腺を緩める感覚。懐かしさだ。

実に懐かしい記憶が蘇ってくる。
今から二十年も前の記憶が、鮮明に蘇ってくる――。

*

潮の香りが鼻孔をつく。

海鳥の鳴き声が耳朶に触れる。

鯨波は岸に吞まれてしまう。

やがて水しぶきが眼前を襲った。

ものの見事にそれらを浴びて、僕らは各々声を上げた。

「うわー、今のすげえ!!」

「やっべえ! びしょ濡れなんだけど!!」

「うう……無性生殖……」

興奮に身を委ねて絶叫する二人を除き、ミズキ――僕は手元の凶鑑に視線を落として嘆いていた。

「おいミズキ、何落ち込んでんだよ?」

「そうだよお、本くらい気にすんだよ!」

『無性生殖の全て』と題された凶鑑は、先程の水しぶきでその大部分を濡らしてしまった。ヒドラやプラナリアという、日常生活ではまず見られない生物たちが事細かく解説されている凶鑑、税込み3780円である。

高額な凶鑑を与えてくれた父親に対する申し訳なさで悶々としている僕がよほど面白かったのだろう、二人は凶鑑を指差しながら口を開いた。

「大事なら持つてくんなよ。てかむせいってなに?」
「夢精じゃね。兄ちゃんが教えてくれたんだけどさ〜!」
「ギャハハっ!!! なにそれきったな!!!」
怒りの感情を喉元で抑えるのに精一杯になる。そもそも、二人が僕を漁港に連れ出さなければこんなことにはならなかったのに。

許せない。

どうしても、許せない。

……しかし、怒りを他人に向けることがどれだけ無意味なことか、僕はよく知っている。

それに優先すべきは怒りではない。凶鑑の修繕だ。

「……帰る」

「はあ? なんで?」

「本、乾かさないと」

「そんなの捨てとけば? もう読めないだろ……っつておい!」

わき目も振らず、駆けていく。

与えられたものを粗末にする自分が許せなかった。

芯を煮やすような、嫌な汗が額に滲む。

漁港・商店街を抜ける。アスファルトを存分に蹴る。反動で両脚に激痛が走る。それでも前へ、前へ。盆地に続く坂道を駆け上がる。

漁港の近くには人工盆地が形成され、集合住宅が数棟建てられており、多くの漁業関係者が暮らしている。父親も例に漏れず漁師だ。

「はあはあ……ただい、まあ……」

疾走による息切れの最中、どうにか言葉を発するが、やはり返事はない。父親は漁で出払っているし、母親は商店街の総菜屋に勤務中だからだ。二人の帰宅まで十分な時間が残されている。

状況確認を終えて洗面所に走る。電気代を貪り喰うドライヤーを駆使し、背表紙から一頁ずつ入念に熱風を送る。一つのシミも許さない、この時は間違いなく元通りにするつもりでいた。

……それでも無理だと悟った時、両腕が疲弊するまで凶鑑を振り続けた。僕の浅はかな知識量では、乾燥させる方法が片手で数えるくらいしか思いつかなかった。

気付けば家から飛び出して、盆地の隅にある草原で静かに泣いていた。

凶鑑を携えて漁港に行ったこと。父親への恐怖心が判断力を著しく低下させたこと。乾かせば元通りになると思い込んでいたこと——何もかもが裏目に出て耐えられなかったのだ。

臆病な僕なんて消えてしまえ。死んでしまえ——

……草花が萎れる音がした。

足音だ。草花を見境なく踏みしめている。

死を懇願した僕は、死神の到来を悟った。

現実を直視するのは止める。振り向けば最後、死ぬのは嫌だと泣きじゃくるに決まっている。

両目を閉じる。音が敏感になる。両手をそれぞれ耳にあて、できるだけ雑音を遮った。しかし、今度は心臓の高鳴りが邪念を催した。うるさい、静かにして。

僕はもう、うんざりなんだ。

臆病な自分が、うんざりなんだ——

「やつ、そこにいるのは……ミズキくん、かな？」

「……な、なな、ナルミ、お姉ちゃん？」

聞き覚えのある声がして両目を見開く。すぐさま振り返ると、肩まで伸びた黒髪を揺らしながら笑顔を作るナルミ姉が視界いっぱいに映り込んだ。

「こんなところで会うなんて奇遇だね。何してたの？」

「……か、考えごと」

「へえ？ 折角だし、あたしにも教えてよっ」

「えっ？」

「お腹空いたでしよ？ これ、一本あげるっ」

「いや、そうじゃなく——んんう！」

言い終える間もなく、ミズキ姉は僕の口内に異物を突

つ込んだ。まだ熱が籠もっている。黄金色にできあがったそれは歯応えがあつて美味しい。つい何本も食べたくなる、そんな味付けに仕上がっていた。

「……これ、鳥つくね？」

「半分せーかい。鳥じゃないんだよねー」

「じゃあ……鯨？」

「そう、せーかい！ よくわかつたね」

「お母さんが働いてるところで売られてるから……」

「あーそつか！ ミズキくんのお母さん、あそこで働いてるんだつたよね！」

僕と三つほど歳が離れているナルミ姉は、その童顔に現れる笑みからよく小学生と間違えられるらしい。彼女が人より食べることも町では有名な話である。

「……まつ、困りごととは誰かに来てもらった方が楽だよ。溜め込まない、溜め込まない」

雰囲気作りの上手いナルミ姉に乘せられてしまう。気づけば一連の出来事が口に出していた。

「……実は、お父さんに買ってもらった凶鑑を濡らしちゃつて。いろいろ試したけど、ダメだった……」

「うわあ、分厚いね。あたし馬鹿だからさ、無性生殖の凶鑑があるなんて知らなかつたよ」

「僕も知らなかつた。お父さんがたくさん本を読めつて渡してきたの」

そうだ。そうなのだ。終始この凶鑑に面白さを抱いた

ことはない。純粹に知識を蓄えるものとして受容し、隅から隅まで目を通して、ただそれだけなのだ。

まるでえらく邪悪なものが取り憑いてると言いたげな——奇怪な表情を浮かべていたナルミ姉は、やがてポーンと右手を打つてみせた。

「……ミズキくんはもう決まつてるの？」

「えっ？ なにが？」

「将来の夢」

ない。決まつてない。まず、決定権がない。将来の決断は父親の意向を避けて通れないからだ。僕はすかさず首を横に振つた。

ナルミ姉は、漁港に顔を向けて口角を上げた。

「ふふっ。あたしはねー、あるよ」

海風が彼女の黒髪を撫でる。

自然に溶け込む彼女の風格がやけに印象的だった。

「あたし、この港町が大好きなの。青と緑に囲まれた自然豊かな場所。生き物も沢山いて、その恩恵に預かつてあたしたちが生きている。みんな、家族を想つて懸命に働いてるんだ。素敵だと思わない？」

——心奥へ続く暗穴に一筋の光が駆け抜ける。長いこと塞がっていた本音を照らす、唯一の光だった。

「あたしたちはいづれ大人になる。この風景を背負つていく立場になるの。もしその時あたし一人だけだったら——きつと何もできない。無力を自覚して、苦悶の末に

この町を去っていく」

……潮の香りが消えた。風景が歪む。

身体の芯から熱くなる。夏が眼前に迫っている。

記憶が途切れようとしている――

「あたしは、できるだけ大勢とこの風景を残していきたいの。何世代にも渡って愛される風景を残したい。だから、ミズキくんにも――」

……途切れかけた記憶が完全に繋がった。

思い出した、という表現の方が正しい。

父親以上に彼女を意識した理由を、思い出した。

僕もナルミ姉の夢を追いかけたかったんだ――。

*

汗が滝のように流れ出る。

首元を伝い、ワイシャツに滲む。

ハンカチはずぶ濡れ、全身はベタベタ。もうどうしようもない。僕は抵抗を諦めて立ち上がった。

昼間の東京は、歩いていけば人に出くわす。炎天下でも、彼らは東京を、日本を、経済を、縦横無尽に回して

いる。そこに僕がいようがいまいが変わりない。

ここ数年勤務して感じたことだが、居場所にするならやはり必要とされる場所がいい。

――それが僕なりの答えだよ、〈父さん〉。

スーツのズボンに手をかけ、ポケットを弄る。下半身もこの灼熱地獄に悲鳴を上げており、スマホにも熱が籠っていた。ロック画面を突破し、電話帳を漁る。

大学の友人に職場の元同僚、上司や行政関係者の名前がずらつと並ぶ電話帳に、〈父さん〉という文字列も同様に刻まれている。

「……いいか、ミズキ。向こう二十年で漁業は著しく衰退するだろう。人は都市部に移住し、漁港は活気を失う。未来のない田舎なんて捨てる。俺はお前に成功してほしいんだよ。賢くなれ。孤高であれ」

それが口癖だった父親も、今はかの地で眠っている。

……まずは、帰郷しよう。

未来は僕らが創るのだと、そう宣言するために。

〈了〉